

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間・池袋

会報誌第35号 2017年1月30日発行



2017年1月4日の夜回り

TENOHASIの理念	1	ホームレスの先にいる	13
巻頭言	2	精神病院長期入院者	
越年越冬活動 無事終了	3	訪問看護ステーションKAZOC	
制度のすきまにいる人を支える	5	渡辺代表インタビュー	
清野事務局長インタビュー		メディア情報	19
なべさん放浪記	8	ご寄付御礼	21
当事者インタビュー			

TENOHASIの理念

2004年春

1. サポート

TENOHASI = 地球と隣のはっぴい空間池袋は、「ホームレス」を含めた生活に困った方が、孤立せずに信頼関係を生きていけることのサポートを使命とします。

「ホームレス」とは、その方がその時にホームレス状態にあるという意味で使います。ただし、「ホームレス」状態に至るまで、また「ホームレス」状態での社会の関係性の維持を大切にします。

1, サポートの仕方

緊急一時支援の他、関係性を大事に当事者とよく話し合い互いの理解の上で状況や希望に応じた、私たちができる必要なサポートを丁寧に行います。

1, 安心の空間

社会的地位、経済状況、年齢、性別、健康状態などの条件に関わらず、人々が地域で安心して生活できる空間作りを目指します。

1, つながる

置かれた立場や状況、境遇など様々なちがいを当たり前のこととしてつながることを目指します。そのために現状を共有するための情報発信をしていきます。

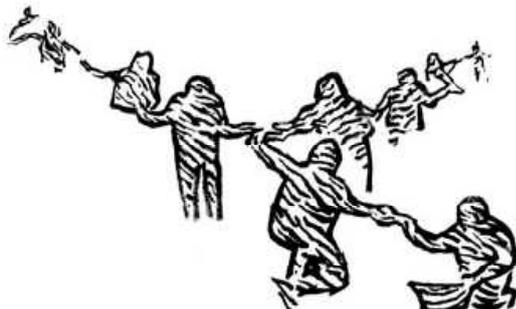
1, 大切にしたいこと

ゆっくりなこと、非効率で無駄だと思えることを大切にします。

素朴なこと、個人の個性や特殊性ということ大切にします。

1, 池袋・地域

池袋という地域性を把握した上で、地域に根付いた、時と場に合った活動をこころがけます。



イラスト

by GEOFF READ

巻頭言 最近のTENOHASI

みなさま、いつもご支援ありがとうございます。

TENOHASIと連携団体で作る「ハウジングファースト東京プロジェクト」は、昨年4月に「SWOC/ゆうりんクリニック」を立ち上げ、それまで足りなかった医療とソーシャルワークを担うセンターとしました。

まだ診察日数も少なく、医師はほぼ無給・ソーシャルワーカーは昼夜を問わず稼働するという立派なブラック企業で（笑）、それでも赤字ぎりぎりの運営を強いられています、ここで診察とソーシャルワーカーの支援を受けた多くの当事者が着実にリカバリへの道を歩まれています。

また、同じく昨年4月から、それまでの共同居住型のシェルターをやめて、アパートを連携団体「つくろい東京ファンド」が借り上げての完全個室型シェルターを開始しました。当事者ご本人と数ヶ月の定期借家契約を結んだ上で生活保護を申請し、契約終了後は福祉事務所の応援を受けて自分が探したアパートに移るといいうしくみです。

今のところ抱えているアパートはわずか7室で、私たちの目指す「ハウジングファースト＝まず安心できる住まい、そして手厚い支援を」にはほど遠いのですが、すでに10人あまりの方が個室シェルターを経てご自分のアパートに住まわれています。

いまの願いは「もっとアパートを、もっとソーシャルワーカーを！」です。

今回の会報誌は、3本のロングインタビューを中心に構成しました。

まずは、TENOHASIの活動の概略を改めてお伝えするために、事務局長・清野のインタビューを載せました。私たちの考える「ハウジングファースト」や「尊厳」「仲間」の重要性をぜひご理解いただけたらと思います。

つぎに、若い当事者「なべさん」の「放浪記」を載せました。家族や福祉の支援を得られずに社会に出た障がい者がどのような苦難の道を歩み、なぜ既存の制度では助けることができなかったかが、ご理解いただけたらと思います。

最後に、訪問看護ステーションKAZOCの渡辺代表のインタビューを載せました。社会から排除されて苦しんでいるのは路上生活者だけでなく、数十万人にのぼるとい精神病院への社会的入院患者も同様です。精神病院での仰天の勤務を経て、彼が何を考え、何を目指してハウジングファースト東京プロジェクトに参加しているのか、お読み下さい。



イラスト
by GEOFF READ



越年越冬活動 2016-2017 無事に終了しました！

2016～2017越年越冬活動は、12月30日から1月2日までの4日間、毎日平均約60名のボランティアの参加を得て無事終わりました。

今回の越冬で炊き出しに並べられた方は平均173人。前回は162人、前々回が161人だったのに対して約10人の増加でした。

理由はわかりません。

今回もたくさんの方から、活動資金・衣類・靴・石けんやカミソリ・カイロ・野菜・がんもどきと生揚げ・鮭・みかん・お米・調味料・お菓子・みかんジュース1800本・クラッカー350個など数え切れないほどのご支援をいただきました。

越年越冬活動では、毎年このときだけ来てくれるボランティアの方々に再会するのも楽しみです。渡り鳥というか、冬の七タというか、1年たっても忘れずにまた来てくれる人たち、これがTENOHASIの財産です。

年越し派遣村以来、毎回参加してくれる練馬区職員労働組合の皆さんも、嬉しい渡り鳥。越年越冬活動の大事な戦力です。労働

運動かくあるべし。

○島区職員労働組合の皆さまもお待ちしております！

同時並行で行われた「ふとんで年越しプロジェクト」では、生活相談にいられた方や夜回りで出会った方、そしてプロジェクトメンバーが東京中をアウトリーチして出会った方25人に宿と食事を提供し、相談して、役所が開く今日から生活保護や自立支援センターなどの公的支援につなげるお手伝いをしました。その中には女性や、障害のある方も多く、必要に応じて継続的な支援をしていく予定です。



ちなみに資金はクラウドファンディングで募りましたが目標額60万円に対して、何と270万円が集まったそうです。感謝感激。おかげでたくさんさんの部屋を用意出来ました。

医療相談では毎回20、40人の相談を受けました。この10日間で合計4回の医療相談があったので、緊急性のある重い病気の方ばかりほとんどおらず、血圧を測ったり風邪薬を出しながらの語り合いが中心だったとか。

医療班の武田裕子医師からのメールです。

「医療相談では、普段気になっていた方とゆっくりお話しすることができました。その中のお一人は、70歳台前半ですが、今も清掃のお仕事をされていて、年金もあり、暖かいアパートに一人暮らしとのこと。でも、親しい友人や頼れる方もおられないとのこと。毎回、炊き出しに来られています。ここに来るとホッとすわられていました。自転車を30分こいで来られているとのことでした。」

生保や年金がある人が炊き出しに並ぶのを嫌がる・非難する人もけっこういるのですが、こんな、家はあるけど孤独な、「心のホームレス」とも言うべき人たちが「ホッとする」場所になっているのであれば、これからも炊き出しを続けていきたいと思います。

清野賢司

イラスト
by GEOFF READ



サンシャイン60の下での生活相談

医療相談の利用者と医師・看護師



「住まい、医療、居場所：地域の連携で、『制度のすきま』にいる人を支える」

特定非営利活動法人TENOHASI 清野賢司事務局長にインタビュー



生活協同組合パルシステムの機関誌「のんびる」2016年12月号にTENOHASIが掲載されました。

インタビューを受けた本人が「こんな立派なことを言っていたっけ？」と驚くくらいいい記事でしたので、ライターの中村未絵さんの許可を得て転載します。



ホームレス状態になったまま、福祉制度を受けられないでいる多くの人が身近な町にいます。その背景には本人も気付かない発達障がいや精神疾患の影響も大きいことが支援団体の調査からわかってきました。いま、地域でどのような支援が必要なのでしょう？

ホームレス状態の多くの人々が、精神障がいや発達障がいを抱える

TENOHASIは、2003年に設立され、東京都池袋を拠点にホームレス状態にある人々への支援を行っている団体です。定期的な夜回りや炊き出し、医療生活の相談会、お茶会、そして個別支援までその活動は多岐にわたります。専門的な支援に携わるソーシ

ヤルワーカー以外はすべてボランティアが運営。事務局長の清野さんも中学校教諭で、授業でホームレス問題を取り上げたことがきっかけで2004年から活動に参加しているそうです。

TENOHASIによると池袋周辺の路上には、いま目算で100〜130人のホームレス状態の人がいると言います。そもそもどういった理由から路上に出てしまうのでしょうか。

「高度成長期に日雇い労働をしていた人が、不況によって職を失い路上に出たというのがもともと多かったケースです。その後はリーマン・ショックで仕事を失った若者が増えました。

そして近年は、発達障がいや精神障がいを持ち、家や地域にいらなくなつた多くの人たちが路上にいることもわかってきました。」と清野さん。

TENOHASIでは、精神科医・看護師・臨床心理士・社会福祉士などの共同研究チームで、2008年、2009年の2度



にわたって路上生活者を対象とした調査を行っています。そこから、精神疾患を持つ人（41%）や知的障がいを持つ人（軽度21%、中程度8%）が多く存在し、また半数以上に自殺リスクがあることが明らかになりました。自身の精神障がいや知的障がい診断されないまま大人になつた人が、人間関係や仕事に適応できないことに行きづらさを感じ、それが路上生活に至る原因となっている場合があ

るそうです。さらに「仕事を失い、人間関係も失い、トラウマや不信心、絶望を抱えて路上生活になるので、健康だった人が鬱状態になってもおかしくありません。元々持っていた精神障がいも、路上生活でさらにこじらせてしまうこともあります」

支援団体が就労を支援するこ
とで自立できる人もいる一方で、
「見えにくい障がい」によって、
路上から脱することが困難な人
もいるのです。



「安心できる住まい」は人
権として保障されるべき

ひとくくりに「ホームレス状態の人」と言っても、抱えている問題は千差万別ですが、福祉制度の枠に当てはまらなければ公的支援を受けることはできません。特に未診断の精神障がいを持った人がいることは考えられていませんでした。

たとえば、ホームレス状態となった場合に生活保護を申請すると、多くの場合は施設に入所することになります。精神障がいがある人にはそのことが大きなハードルになります。

清野さんは、「多くの施設が劣悪な環境で、たとえば二段ベッドを詰め込んだ狭い相部屋で知らない大人同士が共同生活をおくるのです。普通に考えて、イヤですよ。飲酒禁止や門限などのルールもあって、生活費が一日500〜1000円しか渡されないこともあります。寮内でのいじめやケンカも起きます。それに耐えられなければ生活保護は打ち切り。イヤな思いを経験して、もう二度と生活保護を受けたくないという人は多くい

ます」と話します。

特に発達障がいの人には音や臭いに過敏な人も多く、こうした相部屋でのストレスに耐えられません。そのため、TENOH ASIでは大家さんと直接契約をしたアパートを用意して、行政と交渉することで個室に直接入居できる体制を整えています。部屋数が限られているために常に満室の状態ですが、他の団体と協力して、個室を増やす取り組みを進めています。

「安心できる個室で心身のケアをして就労など次のステップに進む方が結果的にうまくいく。アメリカでは『ハウジングファースト』として広まっている方法です。『安心できる住まい』は人権として保障されるべきです」。

その人にあわせた支援を地域のつながりで実現する

生活保護を受けてアパートに入居しても、それで支援は終わりではありません。TENOH ASIでは他団体のソーシャルワーカーと連携しながら路上を脱したあとも支えます。

「福祉制度は、お金があれば自分で生活をマネージメントできるという前提で成り立っています。精神障がいがあることで、アパートをゴミ屋敷にしてしまったりとか、さみしくなって過剰に飲酒してしまうとか、一人では自分らしい生活を立て直せない人もいます。私たちはそういう人たちのお手伝いをしています」

清野さんは、障害の有無にかかわらず、ホームレス状態の人が立ち直るためには『屋根』と『飯』だけではダメだと言います。

「人間は社会的動物です。社会の中で自分が役に立ち、笑いあえる仲間がいると思えなければ、生きていきません」

TENOH ASIでは、かつて路上生活をしていた人たちがボランティアとして活躍しています。仲間や役割を見つけていくので、生活も次第に落ち着いていくのだそうです。

TENOH ASIが、支援において大切にしているのは「その人の唯一無二の尊厳を守る」と。

「これまでの自立支援は、施設での生活が半ば強制されるように、本人の意思と関係なく『A



かBかイヤでも選べ』というものでした。私たちは、まず本人がどうしたいのかを聞いて、その意思決定を尊重する。そのところが本人の『もう一度頑張ってみよう』という基盤になる。本人の希望が、福祉制度に当てはまらないのなら地域の力でどうかなえていけるか考えています」

現在、池袋ではTENOHASSIの活動に賛同する団体が連携して、地域を中心としたネットワークができてつづつあります。

連携団体には、料理教室やパン作りなどの活動を通して、居場所作りや生きがい作りを行う国際NGO「世界の医療団」や、

精神障がい者のためのグループホームを運営する「べてぶくろ」、精神科訪問看護ステーションKAZOCなどがあり、困難を抱えた人のニーズに応える形で、住まいや医療、仲間作りを支えるセーフティネットが広がっているのです。

「路上には、福祉制度のすきまからこぼれてしまった人が多くいます。地域を中心としたつながりがセーフティネットとなり、そのすきまを埋めていきたい。障がいや精神疾患など、さまざまな生きづらさを抱えて孤立した人が、どうしたら地域でその人らしく暮らしていけるか。いま試行錯誤しながら『池袋モデル』を作っているところです」

インタビュー／構成
中村未絵



当事者インタビュー「なべさん放浪記」

なべさんは、マカロニ（連携

団体・世界の医療団事務所）の日中活動の中心となっている、とてもまじめで優しいお兄さんです。もう44歳なんですけど、どこか「お兄さん」と呼びたくなる繊細さと清々しさがありません。

しかし、なべさんは知的・身体・精神障がいを抱え、20年にわたるホームレス生活を続けてきました。その間、助けを求めて生活保護を受けたものの、施設に入れられてストレスを感じ、相談できる人もなくて飛び出してしまふこと30回余りという記録保持者。

今はアパートで落ち着いた生活をされていますが、そこにたどり着くまでに何があったのか、聞いてみましょう。

生まれ育ったのは東京の下町です。母子家庭で、兄弟は弟1人妹3人。生活保護を受けながら生活していました。

小学校1年の時に頭を手術しました。その後遺症もあって薬を飲まないといけないし、母子家庭だといじめられたりして、学校に行かなくなりました。

中3のときに通常学級から特殊学級に移りました。進路について、先生は養護学校をすすめてくれましたが、母や兄弟のために働きたいという思いが強くて、就職することにしました。

初めて入ったのは工場でしたが、そこはシンナーを使うところで、ふらふらになってしまうので、1年で辞めて、蛇口などを作る工場に2年くらい勤めました。でもある日、会社が倒産。これは困ったなと思って、倒産しないところを：・倒産しないところなんてないんですけど、何か自信の持てる仕事はないかなと思って探して、運送会社の面接を受けました。



会社は運転手を募集してたけど、自分は頭の手術をしているので免許は持てない。でも面接で病気というのはいえませんが、なんて言ったかな、「運転する自信がない」とごまかしたような記憶があります。「構内作業なら大丈夫」といったので採用してもらったのがS運輸です。

仕事は真面目にしていたんですが、会社には若い人が一杯居て、みんな飲みに行ったりギャンブルやったりしていたんですよ。自分も誘われるんですが、自分は人

とつきあうのが苦手だし、給料は全部親に渡してるから小遣いの範囲内でやらなきゃいけないし、酒飲めないし。だから断ったんですが、「お前、オレと飲めないのか」とか怒られて断れないことがよくあったんです。辛いことがいっぱいありました。憂さ晴らしをしたいけど自分は酒もギャンブルもやらないので、女性が居るスナックで遊ぶのにはまっやって：飲むのはソフトドリンクなんですけど：小遣いが足りなくなると親に「あと1万円」「あと1万円」と頼むことが続いて、



サラ金に手を出した22か23の時。親には黙っていたけど、督促状が家にも会社にもきて、解雇されました。親にも色々言われて、最後の給料だけもって、実家をでました。もう借金は二度としたくない。

家を出てからどうしたんですか？

そのとき24でした。これからどうやって生活してこう、と悩みま

した。とりあえず日雇い派遣に登録して、引越しとか、倉庫作業とかのバイトで生活しました。みんな単発の仕事です。夜はカプセルホテルとかに泊まって、お金がないときは公園や都電のベンチとかで寝てました。自分は段ボールハウスは作ったことがないけど、基本、ホームレスでした。

手配師に誘われて仕事に行ったこともあり。現場は埼玉だよって言われて外にあったハイエースに乗りました。一緒に乗ったのは2、3人かな。東京の駅を出たのが朝6時で、着いたのは秩父でした。下が事務所と食堂と風呂場になっている。プレハブの建物で、その2階が12人部屋でした。そのときは「今、仕事が無いからご飯食べてゆっくりしてて」と言われて、2、3日居て出てきた。仕事がないなら呼ぶなよって思いました。

ホームレス自立支援法で板橋寮ができたときに初めて入りました。でも、自分はシステムがわからなかったんで、門限があるのもわからなかったし、1ヶ月位で出ました。

その後初めて生活保護を受けました。よく覚えてないけど、最

初はたしか杉並区だったかな。申請に行ったけど一度断られて、でも「病气持つてるんで病院に通いたいし、寝場所があるとこないですか」と聞いたら、「相部屋ですが、いいですか」と言われて行ったのがこの業界で最大手のA法人の施設。

そこは朝が早くて6時起き、6時半に朝飯、昼はなくて夕食5時半。門限が8時だったかな。生活保護費の支給日には寮長と一緒に役所に行って、もらった保護費はそのまま寮長に渡しました。それを寮の事務所で精算して寮費や食費を引いた残りをもらったんですが、最初は1万くらいしかなかったんです。それで来月の支給日まで暮らせて言われるんです。きつかった。

でも、何がきついつて、4畳半の2人部屋だったこと。ここに2人で寝るのが一番辛かった。寮にはいい人も居るけど悪い人も居る。相部屋の人が、外見は良さそうでも悪いことばかり教えられたり。それで不安になって職員に相談すると「じゃあ言うんです」と言わうんだけど、後から相部屋の人に「何で職員に言うんだ」と怒られたり。寮長に「部屋を変えてもらえませんか」というと、「がまんし

る」。生活保護のケースワーカーに言うとき「寮長さんに言え」。親身に話を聞いてくれる人がどこにもいない。

寮は禁酒なんですけど、呑兵衛が多くて、みんな隠れて飲んでる。中でも、外でも。寮長はわかっているけど云わない。「そんなの規則違反じゃないか」と思ったが自分はそのようなのを云えない。ストレスが限界に達して、1ヶ月で出ました。

その後はまたバイトしてサウナやカプセルに泊まる生活をしていました。でも携帯も身分証明書も持てないので、やっぱり生活保護の寮でも我慢して入って住所を持った方がいいのかな、と思ってまた生活保護を受けたんです。で、寮に入られては、また1、2ヶ月で耐えられなくなってる、ということの繰り返しでした。

東京だけじゃなくて埼玉や千葉の施設にも行きました。大手のA、B、C・・・

さっき言ったAの寮は2人部屋で、部屋にテレビが一つあるけど、チャンネル権はたいいて先に入った人が持つてます。ときどき「見ていいよ」と言われるけど、遠慮しちゃう。気持ちの休まる間がな

い。

Bの寮は一応個室なんですけど、四畳半くらいの狭い部屋を板で半分に分けただけなんです。布団を一枚敷くだけの広さしかない。音は筒抜けで、テレビもない。部屋に鍵はあるけど二人で一つです。これは個室って言えますかね？

でも、それはまだましなんです。最悪だったのはCの寮でした。大部屋も大部屋、なんと20人部屋だったんですよ。1つの部屋に2段ベッドが10台。上の段に泊まったんですが、はしごを使って下に降りるときどうしても揺れるじゃないですか。夜、トイレに行こうとしたら、下の人が「揺らすんじゃない。寝てるんだから、静かに降りろよ」と怒鳴るんですよ。そんなの無理でしょ。「あんたがやってみろよ」と言いたくなる。夜、トイレ行きたいときに「どうしよう」と悩みました。ガマンも限界がありますから。あんな所によく2ヶ月も居たと思いますよ。

じゃあ、いい施設ってありましたか？

ないです。施設である時点でダメ。最悪はC寮ですけど。

それから転々として、何年前の11月頃、日暮里に日雇いのバイトに行ったら、キャンセルになっちゃったんです。帰るところもないし、寝泊まりする金もないし、困っていたら、中村あずささんに会って、池袋に行けば第二第四土曜日に炊き出しをやっていると聞きました。

炊き出しで坂内さんに相談しました。「施設はイヤだからドヤ（簡易宿泊所。三畳間くらいの個室が多い）に行きたい」と。葛飾区で保護を受けてドヤに入ったんですが、そこでも物を盗まれたりしてイヤになって出たんです。

ドヤは個室だから施設よりはましですか？

ドヤはペンキリです。いいところもあるけど、物を取られたり、うるさい人が居たりするともうダメ。

このままずっとアルバイト生活かな、でも薬も飲まないといけないし、どうしようかな……と思しながら、仕事があればサウナ、なければ公園やバス停のベンチで過ごす生活をしました。



1年経ってもう一度TENOHASIの炊き出しで相談して、ときわハウス(2016年3月まで運営していたシェアハウス型のシェルター)に入りました。ここは個室で、TENOHASIに行っている人がたくさんいました。そこで東京プロジェクトの日中活動を紹介されて、あさやけベーカリーのパン作りやマカロニの日中活動・鍼灸班の荷物運び・炊き出しの手伝いをするようになりました。それでがんばっていろいろと頑張っていたら、シェアハウスの中でトラブルがあって、出ました。それで約1年間、池袋には帰りませんでした。

でも、ある人から、池袋のみんなが心配してたよ、と聞いて、中村あずささんに電話しました。夜

の11時に中村さんと「いけふくろ(池袋駅の待ち合わせスポット)」で会って、「今夜はもう遅いから今夜はネカフェに泊まって明日相談しましょう」という話になって、翌日、マカロニ(豊島区要町にある拠点)で相談したんです。



と言ってくれて、マカロニの日中活動に行くことも応援してくれました。すごくやりやすいと思いました。

それからしばらくして、マカロニの料理教室でご飯つ

くっていると、「なべさんだったら一人暮らしをしてもだいじょうぶだね」と言われました。

自分は、「しずく」(「べてぶくろ」が運営する精神科のグループホーム)に行こうかと考えていたけど、順番待ちでなかなか入れないと聞いてたんで、「一人暮らしでもいいですか」とケースワーカーに相談して、アパートを探し始めたのが今年の3月頃でした。何力所か見に行つて、いまのここがいいかなと自分で思ったので契約しました。去年の4月28日です。

でも全くの一人暮らしは初めてで、不安でした。ガスや電気の手続きとかわからないし、時期も悪かったんです。ゴールデンウィークになったばかりで、マカロニの活動もないし、このあたりは夜になると全然物音がしないんです。ほんとに人が住んでるのかな、って不安になって、アパートを出ちやい

ました。

ソーシャルワーカーの戸口さんが心配してくれて、木村さんや宮本さんたちも話を聞いてくれて、とりあえず事務所に泊めてもらいました。でも、ここも夜になると誰も居ないからまた不安になりました。

結局、友達Sさんの部屋に4日間泊めてもらったんですが、そのときにSさんが「なべさんね、みんな仲間なんだから心配しなくていいから、安心していいから」って言うってくれたんです。その一言で冷静になって、「アパートでは一人でもオレは一人じゃないんだな」って思えるようになりました。

結局、このときは連休明けの5月6日に自分のアパートに帰ってきて、それからアパートにいることが好きになりました。今は誰かから「泊まりに来なよ」といわれなくても断って帰ります。

それから訪問看護ステーションKAZOCの人が毎週来てくれたり、べてぶくろの宮本くんが来てくれたりするようになりました。「不安になったらすぐ電話して」って言うってくれるんです。

この前、自転車でトラックにぶつかる交通事故に遭ったけど、みんなが心配してくれる。「支え」と

いうのはこういうもんだなって思いました。

7月から精神科の作業所に通いました。最初は週2回から始めてだんだん日数を増やす予定だったんですが、その所長さんから「ボランティアに行く」と疲れちゃって作業所に通えなくなるから、ボランティアは一切止めて下さい」といわれたんです。でも、ボランティアはプライベートで、止めるか止めないかは自分の決めることじゃないですか。「やめたらまたひとりぼっちになっちゃう」と思って、1ヶ月で辞めました。

今は、公園清掃の仕事をしようかと考えています。ワーカーズコップの作業所がやっていて、朝10時から2時間、週2から週5まで選べるんです。この前見学に行きました。こっちなら大丈夫かな、と考えて、今度返事をしようと思つています。

今、日中は何をしていますか？

そうですね、マカロニの日中活動がある日はだいたい行っていきます。

とくに好きなのは、あさやけべ

それからいろいろありました。もう一回生活保護でドヤに行こうとして足立区に行つたけど認められなくて、荒川区にある施設に入つたけれど、そこで体調を崩して倒れて、いられなくなりました。

練馬区のアパートに入ろうという話になって契約書まで書きましたが、「練馬区だとマカロニから遠くなるから寂しくなつて出ちやうんじやない？」と皆さんが心配してくれて、もう一回考え直すことになりました。

最後に、E区の福祉事務所に行つて「ボランティアをやっているの、それが続けられるようにしてくれませんか」と頼んだら、上池袋にある施設を紹介されました。そこだと池袋まで近いから炊き出し夜回りも行けるし、館長さんも「門限は7時だけど、夜回りの日は10時までには帰ればいいですよ」

ーカリーでパン作りです。

一番うれしいのは、あさやけベーカーリーの山田さんや世界の医療団の中村あずささんなどのスタッフの皆さんに頼りにされることです。山田さんには「なべさんが早めに来てくれるのが助かる」と言ってもらえてうれしいです。冬はパン生地の発酵が遅いので早く来ないと焼く時間が遅くなるんですよ。できたパンは夜回りで配ります。

炊き出しがある土曜日は手伝いに行きます。それ以外の土日は、図書館・駅の商店街とか散歩しています。駅前の商店街は人が一杯居ていろいろなお店もあるから楽しいですよ。

訪問看護も来ているんですよ。

訪問看護ステーションKANZOCの人が、毎週火曜にきてくれて助かります。来てくれるのはOさんやNさん、Tさんとか。1回だいたい30分で、血圧と体温を診てくれて、あとちょっと生活する上で不安や心配を聞いてくれます。話を聞いてくれるのはうれしいです。来てくれたら話をしたい。自分が一番よかったことを話したいというのがあります。

健康状態はどうですか

いまは鬱病と高血圧で、薬を飲んでいきます。「ゆうりんクリニックス」に行けるおかげで、健康のことは森川さん西岡さん(両方とも医師)に相談できるのでホント助かります。他のスタッフさんにも相談できるので、安心していられます。みんな知り合いだから自立支援医療の手続きもしてくれました。仲間が居る、相談する人が居る、というのはこういうことかと思えますよ。安心できるんですよ。それと、最近は取材されることが多くて、ちよっと自慢なんです。この前は山田さんと一緒にラジオに出ました。そういうのがあると元気になるますね。今日もそうですけど。

趣味とかはありますか？

これを見て下さい(鉄道カレンダーを指さす)。

あ、鉄ちゃんですね！ すごい、時刻表が2冊もある！

昔から鉄道が好きで、西村京太郎の小説も大好きなんです。

将来は旅がしたい。青春18切符で遠いところへ行きたいんです。

ここだと近くに東武東上線が走っているのでも外で見てても気分が落ち着きます。小さいとき病気になるなければ、電車の運転手になりたかったです。手術の後遺症はまだ残っています。

遠足で鉄道博物館に行ったとき運転シミュレーションをやった楽しかったなあ。

好きな電車は、北海道新幹線、あずさ、新幹線ができる前に走っていた朱鷺・それと隼あたりですね。

将来の夢は何ですか？

将来の夢ですか。

今言った旅もその一つです。

でも、ここまでいろいろ苦労してきたので...

段ボール生活はしたことがないけど、アルバイトしながらベンチとかネットカフェやサウナで生活してきました。ずっとホームレスでした。

それで、みんなに助けってもらって今があるので、こんどは自分がそういう人たちのために何かできることがあればしてあげたい。自

分がサポートしてあげたい。

自分にも何かできることがあると思うんです。今はあさやけベーカーリーでパンを作って、マカロニでおにぎりをつくってそれを夜回りで配ったりしていますが、その他にも何かできるといいと思います。

なべさんならきつといいピアサポーター(元当事者の立場で当事者の支援に当たる人)になりますよ。期待しています。



「ホームレス」の先にいる「精神科病院長期入院者」

今回のスタッフインタビューは、ハウジングファースト東京プロジェクトの重要なメンバーである訪問看護ステーションKAZOC代表の渡邊乾さんです。

精神科病院で組合活動をしたために経営者から嫌われて、病院の敷地に張ったテントで暮らしていたという噂がありますが、マジですか？

そして、あなたにとってのハウジングファーストとは？

歳ですか？ 今、33歳です。22歳で作業療法士になって、都内の精神科病院に就職しました。配属されたのが女子慢性期閉鎖病棟というところで、患者さんの平均入院年数は20年と聞きました。病棟師長に聞いたなら「10年前は平均入院年数が10年だった」っていうんです。ほとんどの人がそのまま入院している。それが当たり前なんです。病棟医長に最初に教わったのは「精神科病院は『鍵の文化』です。命の次に、施錠することが大事」ということです。今思うと、皮肉を込めていたのかも知れない。これが現実だ、と。

作業療法は「トレーニングやりハビリをして元の場所に帰る」ことを目的に行うんですが、この病棟では退院は目的でないの、四季折々のレクリエーションとか、塗り絵とか折り紙とか、「退院しない人たちが鍵を掛けられた病棟の中で、人生を安心安全に消費していくためにするイベント」が仕事だったんです。

そういうところだということは分かってたんですか。

わかってなかったですね。両親とも精神科病院に勤めていましたが、実際に中に入ってみると全然違いました。最初から躓いた。割り切れなかった。

からくりがあるんです。一般科の病院は患者一人入院させたら一日だいたい3万円の診療報酬なんです。精神科病院は3分の1の1万円にしかならないんです。その代わり職員も少なくない。収入は少ないけど人件費もかからなくて、かつ、鍵を掛けて患者を管理できる。だから精神科病院は患者を長期入院させてペイするというビジネスモデルになっているといわれています。

で、経営側は1万円の入院費をどうやってかさ増ししていくか考える。そのためには入

院単価をあげること。特定の難病を持っている人をいっぱい抱えると単価が高くなるんです。特定の難病と精神疾患が同時にある人なんてそうそういないんですが、入院単価を上げるためにある病棟を全員難病患者に病名を変えたことがあったんです。難病を作り出した。

作り出せるんですか？

医者診断ですから。医者が「難病だ」と言ったら難病です。その難病の多くは先天性の病気だから何十年も入院している人がある日突然難病になったりするわけがないのに。

労働条件もぐずぐず。例えば、就業規則が誰にも渡されていなかったり、ポーナスは院長と院長夫人の誕生日に支給されて、もらうまで額がわからない。

王国ですか(笑)? 王の誕生日を祝して王様から振る舞いモノを頂ける、みたいな。

一回、収益が下がったってポーナスが減額されたときがあったんですよ。その減額されたポーナスの支給日に、院長が真っ赤なレクサスを納車させたことがあって(笑)。

「患者を漫然と閉じ込めておいて大丈夫」な空気があって、そうなる職員が取扱いもだんだん患者に似てきて。患者の権利が曖昧だと職員の権利も曖昧になる、と感じました。

1年でイヤになって、もう辞めようと思っ
たんですよ。

次に就職するなら労働組合がちゃんある
ところにしようと思って紹介されたのが精勞
協（精神科病院の労働組合の全国協議会）と
いう団体で「労働組合のある病院を紹介して」
と言ったのが労働組合との出会いです。組合
に行ったら「その病院は何とかした方がいい。
団結しよう。変えられる」って団塊の世代の
人たちにオルグされて。それで、一人でも組
合が作れることを知りました。地域の合同労
組の分会という形にすれば。

就職2年目でした。組合結成通知と要求書
を病院に出して、その日にビラまきました。
そしたらすぐ上司に呼び出されて「お前、何
してるんだ」って詰め寄られて、それを組
合の人たちに話したら「労働組合法に違反す
る不当労働行為だ！」って、次は「不当労働
行為粉砕行動」。あっという間に、「やられ



たらやり返す」という関係になりました。

組合作った翌月には、副院長に呼び出され
て、デイケアに異動を言い渡されたんですよ。
デイケアというのは退院した人が通う場所で
すが、当時、その病院にデイケアなんて存在
しない。存在しない部署に配転されたんです。

ははは すてきですね。

デイケアには人員基準があつて、看護師や
ソーシャルワーカーが必要なんです。僕
以外の職員はいるのか」と聞いたたら「いな
い」。明らかに組合活動による不当な配転だ
から、当然もめるんです。結局、デイケアは
できてそこに行くんですが、病院もやる気が
ないので、できたと思つたらなくなりました。
僕はほとんどん病院に居場所がなくなつて、
病棟も立ち入り禁止みたいになつて、最後は
敷地内に建てられたテントに居たんですよ。

屋根がブルーシートみたいになつ
て、床は地面にホームセンターで買
つたような木のパネルを敷いて。そ
の下は土だから、春になるとタケノ
コが生えてきちゃうんですよ。夏は
羽アリがすごかった。作業療法士の
上司とは関係が最悪で、部署から追
い出されたので何年間も口をききま
せんでした。

組合を一緒にやってくれる人は居な
かったんですか。

何人が居たんですが、僕が合同労組の人た
ちと一緒に車でビラまきやったり、病院の前
で集会やデモをやったりして、ほとんど先鋭
化していった。21世紀に精神科病院にデモ
したのは僕が最初だと自負しているんですが
（笑）、だからなかなかついてきてくれなかつ
たんです。

その頃、僕は20代半ばで、他の組合活動
家はみんな二世代三世代も上の人たちだか
ら、やっぱり珍しくて、気づいたら精勞協で
も副代表になったり、あっちこっちの集会に
行って発言をしたり、聞いたこともないよう
な、誰が読んでいるんだ？みたいなミニコミ
誌にひたすら原稿を書いていました。

楽しかった？

いやいや、すげえ辛かったですよ。髪の毛
だいぶ抜けました。血便出ました。

春闘で、経営側と妥結するのか、交渉継続
するのかを決めなきゃいけない。そういうと
きストライキを打つんですよ。一人で。でも
一人だから病院は痛くもかゆくもないんで
す。それでも一応やるんですよ。拡声器持っ
て院長の悪口みたいなのを病院の前で言うん
ですけど、本当に生気を消耗しましたね。

でも、やっていくと、病院に対して力を持
てるようになるんですよ。病院の方も、集会
されたり、最寄り駅で「この病院はダメだ」
みたいなビラをまかれるのを嫌がってか、交
渉に応じるようになってくるんです。違法行
為については改善させることができたり、ボ

「ナスを決めるときに交渉して一次回答では妥結しないので、病院も最初から二次回答用の予算を組むようになるんですよ。組合があることで、病院が最初に提示した額よりも上積みさせることができるようになるんです。それが組合の「獲得成果」だから「これだけ獲得した」ってビラまきして。組合活動はそうやって先鋭化していきましたね。

しかし、「病棟内立ち入り禁止」って、仕事は何をしていたんですか

とくに何も。経営者と関係が悪化してどんどん窓際に・最後は窓の外に出ちゃったって感じですよ。出退勤管理もとくにされてないので、毎月、たんたんとして口座に給料が振り込まれるという。

よくそんな環境で耐えましたね。何年間も。普通、鬱病になるでしょ。

最初はヒマを謳歌していました。適当な時間に寝起きで出勤して、そこで顔を洗って歯を磨いて、新聞をなめるように読んで、昼寝して。でも、だんだん煮詰まってくるんです。不思議と。それで、精神科病院の外の人たちと繋がりをもつようになってきたんです。それがよかったです。

「べてるの家」との出会いが衝撃でした。それまで管理の対象でしかなかった当事者が主体なんです。病院でやっていることと180度逆。今でこそ「当事者主体」は当たり前

ですが、10年前はぶっ飛んだ思想でした。

2011年の震災の後、福島にしょっちゅう行きました。福島第一原発30キロ圏内に精神科病院が4つ・合計800床あったんですが、封鎖されて全部つぶれました。その精神保健再建グループに入って、どうやって再建するかの議論に参加しました。病院経営者たちは病院を再建しようとしたが、僕は「病院なしで地域で生活できるように再建しよう」とするグループに入っすぐ影響を受けました。イタリアのトリエステで精神科病院をなくした取り組みも学びました。

そうすることで、それまでは精神科病院をいかにまともなものにするか、をテーマにやっていたんですが、べてるの家や、外国の先進的な取り組みと比べると、日本の精神科医療は完全に時代遅れなんだということがわかってきました。病院と僕の関係だけがおかしくなっているんじゃないかと、精神科病院が成り立っているしくみそのものがかおかしい、ということを知って、「精神科病院そのものを否定する」という思想が変わってきました。

その頃、「陽和病院（練馬区の精神科病院）に変わった医者がある」という噂が流れてきました。ホームレス支援をやっているらしい、メディアにも出て、有名ならしい。それが森川すいめいさんでした。何か面白い活動になげられないかと思って夜回りに参加したのがTENOHASIとの出会いです。

病院を辞めたのは、「べてるの家」の向谷地生良さんと福島に行ったことがきっかけで

す。その時、生良さんと、僕の現状・福島の現状・日本の精神科医療の現状について話をしました。その時、生良さんに「精神科病院の中にいたら一生何も変わらないよ」と言われたんです。「地域に出て、入院しなくてもいい仕組みを作るのが大事だ」と。2011年8月くらいかな。それは体験として非常に大きかった。

生良さんも、精神科病院で働いていたとき5年間窓際だったけど、地域での活動が病院に認められて5年後に院長と和解するというエピソードがあるんです。それが僕の支えというか、目標みたいになってたところがあって。だけど、病院にいたら何も変わらないって言われて。完全に集中力が切れましたね。病院の中で抗って、ずっと張りつめていた。プツンと。

自分の進む方向を決定付けた一言でしたね。

森川さんと陽和病院の中で当事者研究の集まりをして、東京プロジェクトの中村さんや清野さんと知り合いました。そこで、40人もの当事者をボランティアで支援していることを知りました。路上から脱してもその後の生活支援をする基盤が弱くて安定しない。だから、精神科訪問看護ステーションが必要だ、と思っただけです。

資本金500万円と30人の利用者がいたら採算が取れると聞き、森川さんと資本金を集めて、僕は事務所兼自宅を35年ローンで購入して、病院を辞めて、訪問看護ステーションKAZOCを立ち上げました。2013

年のことです。500万どころか、すぐに1000万円使い果たしましたけどね(笑)借金まみれです

で、どうでした？

最初は踏んだり蹴ったりでした。当事者が我々のアドバイスを聞かない。アルコール依存症の人が昼間から酔っ払っている。「飲まない方がいいですよ」といっても聞くわけがない。我々ができるのはお掃除だけなんです。



我々が行くことに何か意味があるのか？ 考えてもわからない。負の感情がたまって仲が悪くなる。じゃあ、酒を一緒に飲んでみようか、とやったら連続飲酒になって大暴れ。失踪する人もいる。血圧が高いから薬が必要だけど病院に行くのを拒否する。部屋がゴミ屋敷になってしまい、片付けようとすると怒る。・・・現場が疲弊しました。半年でやめた人、出勤しなくなった職員・・・僕たちは専門知識があるからお役に立てると思っていたが、違いました。何をしたらいいかわからなくなっちゃった。

その一方で、日中活動とかイベントとかもやりました。スカイツリーに行ったり、遠出してレクをやったり、田屋さんと北海道に行ったり。専門家と利用者、という関係でないところで交流して時間を共にすることが蓄積されると、関係が変わってきたんです。最初は困った「アル中おじさん」だったのが、「知り合い」になって、その人の全体状況Ⅱ地域で生活している様が見えてくる。見えてきたとき、話す内容が変わってきました。

雑談が大事なんです。みんな、言葉では言えないいろいろな苦労や悩みを抱えているんですが、雑談して話をどんどん掘り下げていくと、頭の中でぐるぐる悩んでいることが言葉になっていくんです。言葉にできなかつた感情を言語化してはき出すと、すっきりして精神が安定する、ということが肌感でわかってきました。外での「もやもや」を家に持ち帰ってきて、雑談ですっきりすることでまた外に行けるんです。べてるの家では「三度の

飯よりミーティング」と言うけれど、それはその通りだと思えますね。

そうなると、健康状態だけでなく生活全体を語れるようになってきました。健康とお金以外の悩み・・生活の苦労とか、人間関係とかの苦労が見えてきて、話す内容が「健康を維持するために何をするか」から「外の活動に参加するために家で何をするか」に移ってきました。

雑談しているところを新人職員が見ると「話聞いてりやいいんでしょ」と思うらしい。見た目はそうです。でも実際は、「この人の何が頭の中でぐるぐるしているのか」「その人の感情を揺さぶるものは何か」「言葉にできるか」「その正体がわかったらどう付き合っていくか」を常に考えているんです。それが見えて、対処方法にまで持って行くのが技。こつちの人生経験と知識がダイレクトに問われる。自分にどれだけ引き出しがあるかが大事なんです。

目指すのは「問題があっても大丈夫」という状況です。「問題」ときちんとつきあえたら、それは問題にならない。そのために大事なことは、「心を癒やすこと」と、そのために「家の雰囲気良くすること」。薬よりも何よりもそれが大事です。心配事があると家の中でゆっくりできない。ゆっくりできる場所であるために家の中の空気をよくしないと。それができるかどうか問われます。

できなかつたら？



訪問先にて

ぐちゃぐちゃになって、結局、入院になってしまいます。

入院したらよくなるんですか？

とりあえず落ち着かせて退院するんですが、回復はしてないんです。自分の部屋に帰ってきた人が回復して元気になるように支援するのが私たちの役目ですが、その人がどうすれば回復するか、そしていつ回復するか、全然わからない。答えは本人の中にしかないんです。

でも、来るときはある日突然、一気に来ます。一気に変わります。その時には全力で行くんです。引きこもりだった人が作業所に行けそうだと、となったり、恋人ができて生活が潤ったり、家族関係が回復してトラウマが解消したり、その時に。

例えば、引きこもりだった人が作業所に行けそう、というときに、いろいろな阻害要因が立ちはだかります。風呂が汚くて入れないから身ぎれいできないとか、お金の使い方が下手で月末までもたないとか。その時に本人と話し合っただけで集中的に支援します。「風呂の掃除はこつちでやるから、あなたは作業所に行くことに集中して」とか。

ゴミをため込む60代女性がいます。レジ袋の中に、ティッシュとペットボトルと広告を入れたのを大量にためてる。こつちはゴミを片付けたいが、本人には宝物なんで、アパートがゴミ屋敷になっちゃう。仕方ないから、本人がいなくてワゴン車で行ってゴミを持ち帰る。数年間、これがずっと繰り返されてきたんですが、ここ数ヶ月、変わりました。自分からゴミを捨てるようになった。ゴミをゴミだと認識するようになったんです。そうすると、他のことも変わりました。それまでは現金以外は差し入れても拒否だったのに、毛布を受け取った、敷き布団を使ったり、肉まんも受け取ったり・・・大きな変化です。なぜ、いつ変わったのかはわからない。だから、その日のために、ゆるくつながるんです。

渡辺さんは「ハウジングファースト」推進役の一人だと思のですが、渡辺さんにとってハウジングファーストとは？

「ハウジングファースト東京プロジェクト」は、今、路上生活で障がいのある方を対象に

しているけれど、僕はその先に精神科病院に長期入院している何十万という人たちを見えています。

昔、日本と同じようにたくさん精神科病院があったアメリカでは、1960年代に「ケネディ憲章」がでて精神科病院への収容をやめました。でも地域に受け皿を作れなかったの、結局、患者は他の施設や刑務所に行ったり、ホームレスが激増するという結果になりました。業界では有名な話です。

その失敗を見た他の先進国は「精神科病院をなくす」ではなくて「施設収容をなくす」方向にシフトしました。

ハウジングファーストはそのアメリカで始まったんです。アメリカで精神科病院をなくして、そこにいた人たちがホームレスになった経緯があるから、障がいを抱えてホームレスになった人たちが最初に「安心できる住まいを取り戻す」必要があるし、そうすればその後もうまくいく、ということが腑に落ちました。

今、日本で長期入院している人も病院がなくなったらホームレスです。その人たちが地域で暮らせるようになるには、ハウジングファーストが有効だろうと思っただけです。

支援モデルは、路上生活だった人も精神科病院を出てきた人も同じです。僕は訪問看護というケアを提供しているんですが、それだけでは支援のボリュームが全く足りないんです。ポイントになるのは2つ。住まいの質はどうか、尊厳を持って意欲的に参加出来る活動があるか、です。

住まいの質というのはどんなこと？

路上生活だった人が生活保護を受けても、多くの場合は大部屋の施設に入れられて、プライバシーが守られなかったり虫が出たりする劣悪な環境におかれます。そうすると、生活自体が安定しなくて、仕事のことなんて考えられないんです。精神疾患のある人も、そこは同じです。「ケア」というと、普通は本人の身体と精神状態をよくすることをいいますが、住環境も大切なんです。

精神疾患の人ならではの特別なニーズがあるんですか？

精神疾患の人ならではのニーズというものは特にありません。

例えば、足腰が悪い人がエレベーターのない4階の部屋に住んでいたら、バリアの少ない1階に入れるように福祉事務所と交渉する、とか、隣の人が仲間を呼んで騒いだりかんしゃく起こして大声を出すようなら、そういう人がいない部屋に引っ越す手伝いをする、そういうことです。それは誰にとっても必要ですよ。

わかりました。では、渡辺さんの夢と、課題は？

僕のハウジングファーストの目標は「精神

科病院の長期入院の解消」なので、「精神障がいがあっても入院しなくて大丈夫」という社会をつくりたい。

そのための社会資源をどう作るか、作れるか、が課題です。

そのひとつが、昨年春にできた、医療とソーシャルワークをになう「SWOC/ゆりりんクリニック」です。

次に必要な資源は「就労の場」だと思えます。みんなが働ける場所⇨精神科の作業所や、就職先としてのヘルパーステーション⇨ピア（当事者）として働ける場所をつくりたい。

企業就労については、障がい者雇用枠が広がって大きなムーブメントなっているので、自分たちでやらなくても就労支援の事業所につなげられればいいと思っています。そのため計画相談の事業所を去年立ち上げました。ただ、障がい者雇用として認められるには週20時間以上の勤務が条件なんです。週5日、毎日4時間働かなければいけない。そのハードルを越えられずに沈殿している人たちがたくさんいます。もっと短時間でも働けるようにならないといけない。

その次は、クライシス（危機）対応ですね。

「誰かにのぞかれている」「いやがらせをされている」「怖くて眠れない」というふうな幻覚妄想が昂じて生活の危機に直面することがあるんです。「家に落ち着いていられない」「家を離れなければいけない」という状況になったら現状では入院するしかないんで

すが、要は家を離れて休息（レスパイト）出ればいいので、そのための部屋を練馬に借りました。精神科病院をなくした国ではそういう部屋を町中に作るんです。地域で休息（レスパイト）できるかどうかは、病院がなくてもやっていけるかどうかの大事なポイントです。

それと、職員のリクルート。職員も病院から地域へという流れをどんどん作っていかないといけないので。なるべくたくさんの方の雇用の受け皿になりたいんです。看護師、作業療法士・・・でも、この会報を読む人にはなさそう・・・

わからないですよ、これを読んだ人が娘や息子に「ここに理想の仕事があるわよ」って言ってくれるかも（笑）。



「オープンダイアログ」の主導者ヤーコ・セイックラ教授を囲んだKAZOCの面々

ここに出てくる男性Kさんは10年以上前からの知り合いで、長年、路上と施設を転々とされていた方です。

いろいろな課題があつて、正直、アパート暮らしは無理かと思つていましたが、今回の連係プレーでアパート暮らしが実現しました。アパートは稲葉剛さんの「つくろい東京ファンド」が借りた部屋で、生活支援はTENOHASIとゆうりんクリニックのスタッフが中心となつて行つていきます。

今後もどうなるか予断を許さないのですが、声の大きい愉快なおじいちゃん・Kさんの支援をこれからも続けていきます。

朝日新聞デジタルより転載

路上生活者（ホームレス）

の支援は安定した住まいの確保から――。欧米で採り入れられている「ハウジングファースト」という考えに基づき、民間の支援団体が豊島区でモデル事業に取り組んでいる。ホームレスの自立生活をめざす新たな試みだ。

メディア情報 「まず住まい」のホームレス支援 民間団体が試み

11月18日 朝日新聞東京版掲載記事より

豊島区の住宅街にある木造2階建てのアパート。5畳ほどの広さの部屋に男性（65）は7月から住む。ベッドや冷蔵庫、テレビ、エアコンが備えられ、食事は炊飯器でご飯をたき、コンビニなどでおかずを買う。男性は「ちゃんとした部屋で暮らすのは15年ぶりくらい。快適です」と笑う。

千葉県漁師町で生まれ育った。バブルの真っ盛り場に上京し、日雇いの建築現場で働いた。だが、50歳代に入ると、仕事は激減。公園などで寝泊まりし、池袋や新宿、上野を転々とするようになった。「女房とも別れ、ホームレスの世界にどっぷりつかった」

男性の住まいは、ホームレス支援や医療関係の6団体で構成する「ハウジングファースト東京プロジェクト」が用意した。空きアパート1棟（4室）を丸ごと借り、男性らに転貸している。家賃は生活保護の家賃補助を充てる。

敷金や家電製品の購入などの初期費用は、インターネットで小口の寄付を募るクラウドファンディングで調達した。9月末までに目標の100万円を上回る約144万円が集まった。



「従来の支援ではホームレス問題の解決につながる模範事業

の住宅支援部門を担う「つくろい東京ファンド」の代表理事で、立教大特任教授の稲葉剛さん（47）は言う。

首都圏のホームレス支援は、まず民間宿泊所（無料低額宿泊所）などに一時的に入居するのが一般的だ。しかし「貧困ビジネス」と言われる劣悪な環境の施設も多く、自立の前に再び路上生活に戻るケースが目立つという。「いじめられたり、人間関係のトラブルに巻き込まれたりといったことも多い。精神疾患や知的障害がある場合はなおさらだ」と稲葉さんは話す。

男性も都内の民間宿泊所に入居することがあるが、路上生活に戻った。「人間関係の風当たりが強く、命が縮まる思いがした。ああいう場所には帰りたくない」と言う。

そこで、安心して暮らせる住まいの確保を最優先にした今回の事業を始めた。精神疾患や知的障害がある人が主な対象。1990年代に米国で始まり、欧州などでも採用されている「ハウジングファースト」と呼ばれる考えからだ。

男性ら入居者の元にはソーシャルワーカーらが定期的に訪れ、日常生活を総合的に支援し、数カ月後の自立をめざす。

稲葉さんは「行政は最初からアパートに入居させることに消極的だが、施設の環境に耐えかねて脱落してしまう今のやり方ではムダが多い。発想の切り替えが必要なのではないか」と話す。プロジェクトが運営する部屋は現在、豊島区内に7室。少しずつ増やしていきたいという。（武井宏之）

メディア情報 新聞 (前ページ以外)

- ・ 4月2日 東京新聞
「新橋 路上生活者の凍死 歩道に花 後悔の念」
- ・ 7月20日 夕刊フジ
「ボランティアガイド TENOHASI」 *下に掲載
- ・ 8月29日 東京新聞
「路上生活者に『まず住まいを』」



夕刊フジ 2016年(平成28年)7月20日

雨上がりの土曜日の夕暮れ。東京都豊島区のサンシャイン60の近くにある東池袋中央公園には湯気の立つ大鍋が運び込まれ、食事を求める人たちが静かに列を作りはじめた。

午後6時から、きちんと整列するホームレスの人たちへ炊き出しの配膳(はいぜん)を行っているのはNPO法人「TENOHASI」(てのはし)のボランティアの人たち。毎月第2・4土曜日には炊き出しや衣類の配布、医療相談、生活福祉相談などが行われている。毎週水曜日の夜には見回りと握り飯の配布も

ボランティアガイド オレンジ世代

TENOHASI

取材した7月9日のメニューは、湯で柔らかく戻したアルファ米のパウチ入り味噌汁ご飯に、近隣にある「モスク大塚」からイスラム教の祝日である「断食明けの祝祭」を祝して寄付されたカレーとチヤイだった。

「普段は温かい汁物を作っていて、ご飯と一緒に提供しています。野菜を中心にヘルシーであることを考えています。ウチの食事を『東京の炊き出しで一番おいしい』と言

ホームレスの人たちに温かい食事提供

う人もいますが、温かいからだと思います」と事務局長の清野賢司さん。温かい食事は健康のために大切という考えで、1999年の活動当初から気をつけているという。

活動日、清野さんは午前9時に倉庫を兼ねた自宅ガレージから寄付用の衣類を運び出し、調理班は午前11時から調理の準備を始める。午後4時半ごろから配膳や医療相談、生活相談担当をつとめるボランティアがテントやテーブル、椅子の設置準備をする。配膳班は効率よく食事が行き渡るように人員を配置する。取材日のボランティアは合計56人。そのうち初参加者は6人。毎回、多くの初参加者がいるが、初めてでもうまく活動できるように配置されている。

「ホームレスといっても、ここに来る人たちは臭くもなく、普通の服装でも、ここに来る人たちは臭くもなく、普通の服装で

「炊き出しを施される側だった人が、生活相談のアドバースで生活保護を受けるようになり、今では活動する側になっているケースもあります」(清野さん)

水曜日の夜回りや調理などは事前予約が必要だが、配膳ボランティアはアポなしでも参加できる。(松本佳代子)

特定非営利活動法人TENOHASI(てのはし)
http://tenohasi.org
連絡先: ホームページ上のお問い合わせ)から

メディア情報 テレビ

夏から秋にかけて、3社が連続してあさやけベーカリーと山田和夫さんを紹介。毎回、TENOHASIの夜回りでパンを配る様子がテレビに。「なべさん」も登場しています。

- ・ 7月20日 テレビ朝日
「妻が遺した”奇跡のレシピ”」
- ・ 8月24日 TBS
あさチャン
「妻の託した”レシピ”が生んだ奇跡の物語」
- ・ 11月23日 テレビ東京
未来への贈り物
「妻が遺した一枚のレシピ」



はっぴいめーかー大募集

□TENOHASIの活動

- 炊き出し 毎月第2/第4土曜日 東池袋中央公園
- | | |
|---------------------|-------------|
| 鍼灸・マッサージ | 16:00～18:00 |
| 衣類配布 | 16:30～17:00 |
| 医療相談 生活相談 | 17:00～18:00 |
| ほっと友の会（お茶会・第4土曜日のみ） | 17:00～18:00 |
| 配食 | 18:00～18:30 |
- おにぎりと夜回り 毎週水曜日
- | | | |
|---------------|--------|--------|
| おにぎり配布と医療生活相談 | 21:30～ | 池袋駅前公園 |
| 夜回りと医療生活相談 | 21:45～ | 池袋駅と周辺 |
- ハウジングファースト東京プロジェクト 路上脱出と安定した地域生活への移行支援
参加団体：TENOHASI・世界の医療団・べてぶくろ
訪問看護センターkazoc・あさやけベーカリー
東京つくろいファンド・SWOC/ゆうりんクリニック

□ 活動資金のカンパをおねがいします！！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI
振込 ゆうちょ銀行 019(せうけい)支店 当座 259686 トクビ) テノハシ

□ 物資カンパも大募集中！！

衣類（これからは春物。スーツ・女性もの不要）・靴・毛布・カミソリなど
食材（米・缶詰・レトルト食品など。）

【送り先】〒177-0045 練馬区石神井台6-1-28清野方 TENOHASI TEL090-1611-1970)

寄付・ボランティアのお問い合わせ
メール：TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から
電話：090-1611-1970(事務局長 清野賢司 平日は18時以降)

特定非営利活動法人TENOHASI
会報第35号
2017/1/30発行

□ホームページ <http://tenohasi.org/>
□メール tenohasi@yahoo.co.jp
印刷 アビーム(社会福祉法人復生あせび会)

発送元

〒177-0045
練馬区石神井台6-1-28 清野方
TENOHASI
TEL 090-1611-1970
(事務局長 清野賢司)